

教育研究業績書

2018年11月08日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：秋山 正子

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護，訪問看護，在宅医療，ターミナルケア	在宅看護，訪問看護，ターミナルケア，がん看護，アロマセラピー
学位	最終学歴
修士（保健学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了、博士後期課程在学中

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 在宅看護学の授業実践（在宅看護学Ⅱ）	2017年4月14日～2017年7月28日	在宅看護学Ⅱでは、在宅看護における訪問技術、医療処置と看護、栄養管理、呼吸管理、褥瘡などについての講義・演習を行なった。特に「在宅での生活における栄養管理」では「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理演習」の主担当として、指導過程を作成のうえ講義・演習を行なった。目標は「HPNを必要とする療養者への看護について説明できる」であり、具体的には、HPNの実施と管理について理解できること、HPNを利用する療養者の生活の特徴について説明できること、CVポート（リザーバー）へのヒューバー針の挿入方法（穿刺と抜針）が習得できることを目標とした。授業資料はパワーポイントで作成し、独自に開発・作成した模擬ポートモデルを用いた演習のデモンストレーションには、書画カメラを用いた。一部、DVDを視聴し実際の手技の流れや家族への説明がわかりやすいようにした。これらの結果、全員が安全に穿刺・抜針を体験することができた。また、グループワークでHPNを必要とする療養者の看護について話し合い、グループ毎の発表を行ない学びを共有した。授業後のアンケートでは、資料・話し方・演習がわかりやすかったとの感想が多かった。
2. キャリア対策（実習施設就職説明会・ガイダンス・キャリアハンドブック作成、研修準備）	2017年4月1日～現在	看護学部キャリア委員として、「実習施設就職説明会」「3年生対象キャリアガイダンス」「進学（保健師・助産師）に関するガイダンス」などの企画・運営を行なった。また、履歴書の書き方や面接などに関するハンドブックを、主担当として作成中である。来年度の丹嶺研修におけるシニア研修では、4年生を対象に履歴書の書き方や面接についての対策を行なう予定であり、主担当として準備を進めている。
3. 在宅看護学の授業実践（在宅看護学実習）	2017年10月03日～現在	訪問看護ステーションへの2週間の実習に同行している。学生が、療養者と家族の健康と生活を理解し療養上の問題をアセスメントできるよう、客観的事実と学生自身が感じ取り考察した内容を重視し、指導を行なっている。具体的には、本学看護学部看護学科在宅看護学分野で開発した在宅用のICFシートを使用し、療養者の全体像をとらえ看護を行なえるようにしている。また、学生が看護上のニーズを見出し看護計画を立案できるよう、自主的で計画的な実習を行なえるよう学生をサポートしている。さらに、学生が訪問看護の特徴や社会資源の活用、他職種との連携を理解し説明できるよう、実習施設と協働し実習を進めている。在宅への訪問という慣れない状況での実習に学生が安心して取り組めるよう、細やかな説明とフォローを行い、日々および実習全体の目標と評価を共有するようにしている。看護師15年（訪問看護師5年）の経験を活かした教育を行なっている。実習要項も在宅看護学分野で討議を重ね作成した。
4. 在宅看護学の授業実践（在宅看護学Ⅰ）	2015年9月～現在	在宅看護学Ⅰにおいて、出欠確認や資料印刷、学生フォローなどを行なっている。
5. 在宅看護学 修士課程院生への研究指導補助	2015年4月2016年3月	本学の看護学研究科において、在宅看護学分野の修士課程院生への研究指導に参加し、ゼミや学会発表などで補助的に関わった。
6. 在宅看護学の授業実践（在宅看護学概論）	2015年4月～現在	在宅看護学概論において、出欠確認や資料印刷、学生フォローなどを行なっている。
7. 初期演習	2015年12月3日	1年生を対象に、在宅看護の実践について、訪問看護師として働いていた5年間の経験を説明した。臨場感を感じ取れるよう、具体的な内容を話した。訪問場面だけではなく、自動車や自転車、原付バイクでの移動などについても話し、町全体が病院で、訪問看護ステーションがナースステーションであるようなイメージを持ってもらうようにした。授業後のアンケートでは、「訪問看護についてあまり知らなかったが具体的なイメージを持つことができた」という感想が多かった。
8. 『ケアスタッフのためのアロマセラピー』講師：ハンドマッサージ	2014年11月14日	西宮市社会福祉事業団内の職員研修として、90分の講義・実習を主催し、ハンドマッサージ（タッチケア）の実

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
9. 『ケアスタッフのためのアロマセラピー』講師：アロマスプレー作り	2013年12月20日、	習を行なった。訪問看護センター・ホームヘルプセンター・居宅介護支援事業所・介護老人保健施設・デイサービス・デイケア・総務部等に勤務する職員が参加した。在宅ケアにあたる全職員のサービスの質向上に反映する内容とした。
10. 『女性のからだセミナー』講師	2008年6月13日	西宮市社会福祉事業団内の職員研修として、「ケアスタッフのためのアロマセラピー～アロマスプレーを作ろう」と題し、90分の講義・実習を主催した。訪問看護センター・ホームヘルプセンター・居宅介護支援事業所・介護老人保健施設・デイサービス・デイケア・総務部等に勤務する職員の自由参加であり、実施後のアンケートでは「今後も開催してほしい」「次回も参加したい」という回答率が全研修中第一位であった。
11. セラピストのためのカラーセラピー練習会主催	2007年4月から2007年12月	大阪ガス泉北ディリバにおいて、90分の講義と実習を行った。風邪やインフルエンザへの対策（手洗いの歌等）、ホルモンバランス異常について、メタボリックシンドローム対策について等の医療的講義に加え、カラーセラピーやアロマセラピー、ハーブを生活に取り入れるための講義と実習を行った。在宅生活を送る一般参加者に、健康のためには西洋医学のみでなく衣食住等の生活や自然由来の代替療法や生活の智慧の果たす役割も大きく、それらは一体であることを伝え、ライフスタイルに組み入れることを提案した。
12. NPO法人におけるアロマセラピー研究の講習実施	2007年2月から2010年4月	セラピストのためのカラーセラピー練習会を計6回主催した。
13. 在宅患者を支援するクリニック職員へのカラーセラピー勉強会主催	2007年11月7日	NPO法人においてアロマセラピー研究を促進するための研究部を組織した。研究動機の重要性やアロマセラピーにおける研究について講義を行なった。
14. 研修・事例検討会・勉強会実施	2001年4月から2015年3月	クリニック職員を対象にカラーセラピーの勉強会を主催した。色彩が心身に与える影響について講義し、在宅生活を送る外来患者の生活やクリニック内の色彩環境について意見交換を行なった。元来、植物や絵画などを多く取り入れたクリニックであったが、医師・事務員・看護師が全員で診療環境についてのディスカッションや情報共有を行なう機会となった。
2 作成した教科書、教材		
1. 在宅看護学Ⅱ 定期試験問題	2017年7月7日	病棟および訪問看護センターにおいて、業務改善リーダー・研修委員・事例検討委員・感染リクナース・リスクマネジメント委員として、毎月の研修・事例検討会を実施した。また、必要時に感染管理やリスクマネジメント、ポジショニング等の勉強会を主催した。
2. 在宅看護学実習要項	2017年5月29日	在宅看護学Ⅱで担当した「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理」についての試験問題を作成した。講義・演習で学習した内容を再確認し確実に修得できるよう、記述式や選択式の問題を作成し担当項目の成績評価を行なった。
3. 在宅看護学Ⅱ 事前課題「中心静脈栄養法（HPN）を必要とする療養者の看護」	2017年5月26日	在宅看護学実習で使用する実習要項を、分野会議で繰り返し討議し作成した。内容は「実習目的、実習目標、単位・時間数・時期・履修要件、実習計画、実習内容と実習スケジュール、実習記録、評価、注意事項、実習施設一覧、記録用紙」から構成した。特に評価表は、実習目標を基軸に助教3名による文献検討などから情報を収集・整理し、系統的に作成した。
4. 在宅看護学Ⅱ「演習用教材」：授業資料	2017年5月26日	在宅看護学Ⅱで担当した「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理」についての事前課題を作成した。講義・演習での学びがより効果的なものとなるよう、HPNを必要とする療養者の看護について、日常生活で気をつけることや起こる可能性のあるトラブルについて記述してもらい演習時に持参してもらった。この事前学習をグループワークにも活用し、幅広く深い理解をサポートすることができた。
5. 兵庫県立宝塚高校「看護とケア」授業教材	2017年5月25日～11月16日	在宅看護学Ⅱで担当した「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理」についての授業資料をパワーポイントを用い作成した。授業の目標や流れ、演習内容（穿刺と抜針の体験およびグループワークと発表）がわかりやすいよう構成した。画像や色を効果的に使用したほか、資料を見ながらデモンストレーションの確認および実際の体験が行なえるよう、内容を工夫した。また、実際に西宮市のホームページで公開されている「在宅医療廃棄物の出し方」の資料を紹介し、実際の運用をわかりやすく説明した。授業後のアンケートで、資料やスライドの字の大きさや表示方法がわかりやすかったとの感想を多く得た。
		兵庫県立宝塚高校「看護とケア」の科目において、パワーポイントを用い、「バイタルサイン」「睡眠・休息と運動」「アロマセラピーで五感の癒し」「看護はサイコー！」の授業資料を作成した。演習を多く行ない、そのためのワークシート（バイタルサイン記入票、バイタル

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
6. 在宅看護学Ⅱ「演習用教材」：HPNシミュレーションモデル（模型）の考案・作成	2017年5月11日	<p>サイン測定評価シート、生活リズムワークシート等）やアロマ葉を作成した。ワークシート以外の講義用資料も書き込み式とし、記入や質疑応答、クイズやグループワークを行なうことで、生徒たちが積極的に参加していた。アロマ葉は画用紙とマスキングテープで作成し、パンチで穴をあけリボンを通せるようにした。生徒に好まれるデザインにすることで、より親しみをもってアロマセラピーを日常に取り入れてもらえるよう工夫した。テープの色も、覚醒と鎮静をイメージできる暖色系と寒色系にし、五感を大切にすることを伝えた。</p> <p>在宅看護学Ⅱで担当した「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理」で使用使用するHPNシミュレーションモデル（模型）を独自に考案・開発し作成した。皮下に埋め込まれたCVポート（リザーバー）にヒューパー針を穿刺するシミュレーションができるよう、手のひらサイズの模型を作成した。具体的には、下層から、CDケース、CVポート、清掃用スポンジ（激落ちくん）、肌色の入浴用シートで構成し、周囲をマスキングテープで補強した。また、ヒューパー針をリキャップせずに学生が次の学生に渡せるよう、チーズの空きトレイに化粧用コットン（シルコットうるうるコットン）を乗せ、受け渡しをする工夫を行なった。これらにより、安全に全員が穿刺・抜針の体験演習を行なうことができた。在宅看護では各家庭にある物品を工夫して利用することが多いことを学生が実感できるよう、演習においても既製品でなく家庭にあるものを多用した。なお、マスキングテープを使用することにより、高価な教材（CVポート）を汚染・破損せず来年度以降も継続使用できるようにした。</p>
7. 在宅看護学Ⅱ「演習用教材」：点滴除去予防模型の考案・作成	2017年5月11日	<p>在宅看護学Ⅱで担当した「在宅における中心静脈栄養法（HPN）の管理」で使用使用する点滴除去予防模型を独自に考案・開発し作成した。</p> <p>具体的には、点滴ルートに見立てたストローに長方形に切りボタンホールを開けた不織布シートを挟み込むように貼付した模型を作成し、演習時の服装であるポロシャツのボタンに装着できるようにした。授業後のアンケートでは、「DVDや画像でははっきりとはわからなかったが、模型を作ってくれたので手に取って使い理解することができた」「ストローを使った説明がわかりやすかった」との感想があり、効果的であったと考えた。</p>
8. 在宅看護学の授業実践（在宅看護学Ⅱ・在宅看護学実習）：ICFワークシート	2016年12月～現在	<p>在宅看護学Ⅱ・在宅看護学実習における看護過程の理解・演習・実習が効果的に行なえるよう、在宅看護学分野で独自に在宅実習用のICFワークシートを作成し、授業に用いた。心光ら（2010, 2012）が作成した精神看護学実習用のシートに着想を得て、文献検討やディスカッションを行い系統的に作成した。また、演習においては記載例のシートも作成した。このシートを用いることで学生の理解が進み、実習でも効果的に使用できている。学生からは、1枚でまとめることができ記載例もあってわかりやすいとの感想を得ている。今後、評価も行ない改良していく予定である。</p>
9. 在宅パーキンソン病患者を支援するホームヘルパーのための説明用紙	2014年6月15日	<p>在宅で生活する日中独居のパーキンソン病療養者宅に訪問するヘルパーへの説明用紙「褥瘡が改善するためのオムツ交換方法」「ストーマパウチがはずれていた時の対応」を作成し、活用した。これにより、ヘルパーとの連携が促進された。また、療養者の褥瘡が治癒した。</p>
10. 在宅ALS患者を支援するホームヘルパーのための説明用紙	2014年6月15日	<p>在宅で生活する独居のALS療養者宅に訪問するヘルパーへの説明用紙「吸入の仕方」「吸引時の注意事項」を作成し、活用した。他職種の職務範囲や連携方法について、兵庫県看護協会にも相談しながら、難病療養者が在宅生活を継続できるよう、支援した。</p>
11. 感染症テスト	2010年9月27日	<p>訪問看護を行なう事業所において、職員を対象に標準予防策・感染経路・緑膿菌対策・清掃について講義を行なった。全体会議で対策を確認したうえ、講義直後と1か月後に自己採点式のテストへの記入を行い、理解と行動力の確認ができるようにした。ルールを提示するだけでなく、その根拠の理解が行動と業務改善のためのディスカッションにつながるよう工夫し、全職員の理解が深まった。</p>
12. 「アロマセラピーに関する研修」におけるスライドおよび配布資料	2009年8月2日	<p>「アロマセラピーに関する研修」では、パワーポイントを講義において使用し、配布資料に活用した。主に在宅生活者を対象に施術を行うアロマセラピストたちが、自らの実践を科学的にとらえ、研究についての理解を深めることができるよう、講義を行った。ナイチンゲールの医療統計における功績を伝えると共に、「看護覚え書き」のなかから、色や花・植物やそれらを活用した環境が、病人にとって大きな意味を持つという記述を複数抜粋し、紹介した。</p>
13. クリニック勉強会におけるスライドおよび配布資料	2007年11月7日	<p>カラーセラピーや色彩環境に関するパワーポイントを講義において使用し、配布資料に活用した。在宅で生活する外来患者に密接に関わるクリニックの医師・看護師・</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		事務職員の視野を広げることに役立つ内容とした。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 看護学生・医学生への訪問看護臨地実習指導	2011年6月1日から2015年3月31日	5か所の訪問看護センターにおいて、4か所の大学および2か所の専門学校の臨地実習指導に関わった。
2. 放射線・放射線治療に関するオリエンテーション用紙「放射線・放射線治療Q&A（質問と回答）」作成	2003年5月1日	放射線・放射線治療に関するオリエンテーション用紙を作成し、大阪大学医学部附属病院内での統一したツールとした。放射線治療による副作用や、被曝に関する内容をまとめた。作成にあたっては、文献を踏まえ、患者・家族・医師・放射線技師・看護師の意見を取り入れた。
3. 感染管理マニュアル作成	2002年5月1日2006年12月31日	感染リンクナース・業務改善リーダーとして、所属病棟における感染管理マニュアルを作成し、業務改善に役立った。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 平成26年度介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修事業（特定の者対象）指導者講習修了	2014年7月5日	介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修事業（特定の者対象）による研修を修了し、指導者資格を得た。その後、神経難病を持つ療養者に訪問介護を行なう者への指導を実施した。 登録番号：第26S002T号
2. 日本アロマセラピー学会認定看護師	2010年3月21日	必修講義・実習を受講し、学会発表を行なったうえ、認定試験（東京）に合格し、日本アロマセラピー学会認定看護師資格を取得した。 登録番号：第03840号
3. 社団法人吹田市歯科医師会主催介護者向け口腔ケア実践講座修了	2010年10月18日	吹田市歯科医師会が主催する介護者向け口腔ケア実践講座を修了した。
4. AHCP（現HCJ）認定メディカル・ナースアロマセラピスト	2009年9月30日	267時間のカリキュラムを修了し、メディカル・ナースアロマセラピスト（MNA）の資格を取得し、述べ約200名の全身トリートメントや緩和ケアボランティアでのハンドマッサージ・フットマッサージなどを実施した。 ANATOMY PHYSIOLOGY&HOLISTIC MEDICINE 修了認定 登録番号：第080310005号 BODY MASSAGE&AROMA THERAPY 修了認定 登録番号：第0909101014号
5. 英国民間機関認定 カラーケアプラクティショナー	2006年2月26日	110時間のカリキュラムを修了し、英国民間機関認定カラーケアプラクティショナー資格を取得し、述べ約600名のカラーセラピーを実施した。 登録番号：第13875号
6. 看護師国家資格	1998年5月15日	登録番号：第1017580号
7. 保健師国家資格	1998年5月15日	登録番号：第87936号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. オープンキャンパス アゼリアでのQ&Aコーナー	2017年7月15日	本学オープンキャンパスにおいて、アゼリアでのQ&Aコーナーを担当した。受験希望者や保護者に対して、同席した学生と共に、看護学科の特色やカリキュラム、学生生活などについて説明した。
2. 兵庫県立宝塚高校「看護とケア」講師	2017年5月25日～2017年11月16日	「バイタルサイン」「睡眠・休息」「活動」「アロマセラピーで五感の癒し」「看護はサイコー！」の授業（7回）を担当した。全回でパワーポイントを用いたワークシートを作成・使用し、演習も取り入れた。「バイタルサイン」では、講義の後、実際に測定ができるよう演習を行なった。初めての経験であるが全員がバイタルサインの観察を行なうことができた。 「睡眠・休息」「活動」では講義と共に、自分の生活リズムについて考える演習を行なった。 「アロマセラピーで五感の癒し」では、アロマセラピーの基本や医療・介護・福祉分野での活用について説明したうえで、香りの感想をシートに記入したり、各生徒が好きな香りで用途別（覚醒・鎮静）の「アロマ菜」を作成したりという演習を実施した。 「看護はサイコー！」では、訪問・病棟・外来などでの看護経験を話し、質疑応答やディスカッションを行なった。予め確認した生徒のニーズに対応する内容とした。アンケートでは当演習に興味深かったとの感想を多く得た。また、86%の生徒が看護やケアへの進路を決めたことや29%の生徒が将来は在宅看護を行ないたいと話したことから、授業の効果があつたと考えられた。
3. 看護学部キャリア委員会 委員	2017年4月～現在	看護学部キャリア委員として、「実習施設就職説明会」「3年生対象キャリアガイダンス」「進学（保健師・助産師）に関するガイダンス」などの企画・運営を行なった

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. 看護学部自己評価担当	2017年4月～現在	<p>。また、履歴書の書き方や面接などに関するハンドブックを、主担当として作成中である。来年度の丹嶺研修におけるシニア研修では、4年生を対象に履歴書の書き方や面接についての対策を行なう予定であり、主担当として準備を進めている。</p> <p>看護学部自己評価担当として、「看護学部自己評価委員会規約」「看護学研究科自己評価委員会規約」「点検・評価報告書」などの作成に携わっている。担当としての活動を通して、大学・学部の組織構造や各委員会・担当の役割、規約などについて理解を深めることができています。</p>
5. 看護系大学入試説明会への出務	2016年7月9日	大阪（梅田）で行なわれた入試説明会に出務し、受験希望者や保護者に対して看護学科の特色や入試に関する情報などを説明した。
6. 看護学部自己評価委員	2016年4月1日～2017年4月30日	看護学部自己評価委員として、「看護学部自己評価委員会規約」「看護学研究科自己評価委員会規約」「点検・評価報告書」などの作成に携わった。委員としての活動を通して、大学・学部の組織構造や各委員会・担当の役割、規約などについて理解を深めることができた。
7. 日本セカンドライフ協会(JASS)『住み慣れた家庭で最期まで～在宅看護を学ぶ』 講師	2016年2月18日	在宅看護をテーマに120分の講演を行なった。対象者は企業をリタイアしたOB・OGやその家族であり80歳台の参加者が多かった。具体的には、後述<>の内容について講義・演習を行なった。合間にながいき体操や嚥下訓練などを取り入れ、長時間でも楽しく参加できるよう工夫した。積極的な参加者が多く、講演中・後の質問やコメントが多かった。資料として勇美記念財団の「暮らしの健康手帳」を配布し日常に役立ててもらおうようにした。資料はパワーポイントを使用して作成・配布しプロジェクターで投影した。
8. オープンキャンパスでの実習室企画	2015年6月1日～現在	<p><訪問看護利用の実際、体調管理、療養支援、医療処置・ケア、食事の支援、排泄の支援、ストーマケア、清潔の支援、移動の支援、リハビリテーション、作業療法、言語訓練、嚥下訓練、作業療法、福祉用具、住宅改修、社会資源の紹介、多職種連携・地域連携、持続静脈注射、高カロリー輸液、褥そうのケア、胃ろうのケア、服薬の支援、呼吸ケア、在宅酸素療法、人工呼吸器、災害への備えと対応、緩和ケア、看取りケア、グリーフケア、精神科訪問看護、認知症のケア、家族支援、不測の事態や急変時の訪問や電話相談、看護小規模多機能型居宅介護></p> <p>武庫川女子大学オープンキャンパスにおいて、公衆衛生看護学・在宅看護学・精神看護学実習室の企画「家庭での看護～赤ちゃんからお年寄りまで～」を初回から運営している。特に、実習室の展示やベッド上での洗髪については、中心となって企画した。ベッド上の洗髪については、家庭にあるバスタオルやビニル袋、新聞紙などを用いてケリーパッド（洗髪器）を作成するデモンストレーションや展示を実施した。実習室は、清潔で機能的に整備し、棚には「訪問看護師のカバンの中身」や褥瘡モデルなどを効果的に展示している。</p>
9. 武庫川女子大学看護学部親睦会担当	2015年4月1日～2016年4月30日	親睦会担当として、歓送迎会・忘年会を企画・運営したり、冠婚葬祭に関する業務を行なったりした。忘年会ではカード作成やゲーム企画など、積極的に工夫して開催した。活動を通し、開設間もない学部において教職員が親睦を深めることに貢献した。
10. 武庫川女子大学看護学ジャーナル編集委員会 委員	2015年4月1日～2017年4月30日	武庫川女子大学看護学ジャーナル編集委員として、ジャーナルの編集に携わった。特に創刊号では、看護学部開設記念講演の記事を担当した。また、第3号以降の業務が効率よく行なえるよう、業務の作業手順を他の編集委員と協力して作成した。
11. 大学入学試験監督業務	2015年11月～	武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部において、公募推薦入試、一般入試の試験監督業務を行なっている（学外入試を含む）。
12. 訪問看護課におけるリスクマネジメント部会活動	2014年4月1日～2015年3月31日	西宮市社会福祉事業団訪問看護センターにおいて、リスクマネジメント部会部員として活動した。インシデントレポート記入の働きかけや事例検討会、リスク管理・対策などを中心となって行なった。
13. 訪問看護センターにおける事例検討会開催	2013年5月8日～2014年7月9日	西宮市訪問看護センターでは当番制、西宮市北口訪問看護センターにおいては事例検討会委員として、毎月1回の事例検討会を主催した。訪問看護を行なううえで、共通認識を持つべき内容や会議が必要な内容について、タイムリーな事例を取り上げた。また、訪問看護業務における記録の取り扱いや防災対策についても検討・周知した。
14. 訪問看護研修会共催	2013年4月17日～2014年4月16日	訪問看護センターにおいて、教育研修部員として、月1回の訪問看護課研修会を開催した。うち3回は、平成25年厚生労働省老人保健健康増進等事業「訪問看護ステーションの多機能化に向けたモデル事業」として開催した。セ

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
15. 厚生労働省「訪問看護ステーションの多機能化に向けたモデル事業」における教育研修（交換研修）	2013年10月8日～12月10日	センターに所属する看護師・保健師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・介護支援専門員のほか、他センター訪問看護師、看護学生、認知症介護者の会参加者、民生委員等、各回80～110名を対象とし講義や合同事例検討会を実施した。 西宮市訪問看護センターで、平成25年厚生労働省老人保健健康増進等事業「訪問看護ステーションの多機能化に向けたモデル事業」の教育研修モデル（交換研修）において、他の訪問看護ステーションからの訪問看護師の同行を受け入れた。
16. 認定看護師教育課程の訪問看護臨地実習	2011年6月1日2015年3月31日	訪問看護師として、訪問看護認定看護師・緩和ケア認定看護師の各教育課程における臨地実習を受け入れた。同じ看護師として、それぞれの専門性を活かしたディスカッションを行い、看護サービスの向上に貢献した。
17. 看護学生・医学生の訪問看護臨地実習指導	2011年6月1日2015年3月31日	訪問看護師として、看護学生・医学生の臨地実習を受け入れた。特に2013年4月からは、実習担当として関わった。千里金蘭大学、甲南女子大学、神戸大学、北斗会看護専門学校、西宮市医師会看護専門学校の看護学生、兵庫医科大学の医学生の同行訪問において助言・指導を行い、カンファレンス参加・記録指導を行なった。各学生のレディネスに応じ、訪問看護のやりがいと意義、目標設定と確認、手技やコミュニケーションを含む一挙手一投足の根拠、フィジカルアセスメントの重要性、医療機関と在宅サービスとの連携について主眼を置き指導した。
18. 訪問入浴・デイサービス・デイケア・グループホーム・介護付き有料老人ホームでの派遣勤務	2011年5月16日～2011年12月31日	在宅看護に関わるあらゆる場所で勤務できる力をつけ、訪問看護業務に活かすため、訪問入浴・デイサービス・デイケア・グループホーム・介護付き有料老人ホームでの派遣勤務に携わった。
19. 訪問看護・訪問介護・有料老人ホームにおける感染対策	2010年9月9日、9月27日、10月8日	感染委員として、訪問看護ステーション・訪問介護ステーション・居宅介護支援事業所・有料老人ホームに勤務する看護師・介護福祉士・ヘルパー・相談員・介護支援専門員・事務員を対象に、標準予防策・感染経路・緑膿菌対策・清掃について講義を行なった。全体会議で対策を確認したうえ、講義直後と1か月後に自己採点式のテストへの記入を行ない、理解と行動化の確認ができるようにした。
20. 訪問看護・訪問介護・有料老人ホームにおけるポジショニング勉強会	2010年8月26日	訪問看護ステーション・訪問介護ステーション・居宅介護支援事業所・有料老人ホームに勤務する看護師・介護福祉士・ヘルパー・相談員・介護支援専門員・事務員を対象に、(株)タイカの担当者と共催し、ポジショニングに関するセミナーと演習を行なった。職員同士での実習の後、寝たきり状態の方々の居室を回り、各利用者にとって最適なポジショニングを確認した。
21. 訪問看護師	2010年4月26日～2015年3月31日	西宮市社会福祉事業団訪問看護センター、セコム新大阪訪問看護ステーションなどで訪問看護師として勤務した。
22. 大阪府看護協会訪問看護研修ステップ1修了	2010年11月9日～2012年2月10日	209時間のカリキュラムを修了し、訪問看護に必要な知識・技術を修得した。大阪市内の医師会訪問看護ステーションにおける同行実習も行った。 登録番号：第939号
23. クリニック 外来看護師・アロマセラピー	2008年10月1日～2010年4月25日	アロマセラピーを導入したクリニックにおいて、外来看護師として勤務した。一部往診もあり、在宅でのストーマ管理などを支援した。
24. クリニック 外来看護師	2007年7月1日～2010年3月4日	絵画ギャラリーと庭のあるクリニックで外来看護業務を行なった。ギャラリーでは、通院患者やその家族、地域の方など縁のある方が、月替わりで個展を開催していた。また、玄関には季節の花のアレンジが専門家により活けられていた。医療・看護における五感の重要性を重視した環境で、ホリスティックな看護を実践した。
25. 生活習慣病対策事業「万歩計プロジェクト」	2007年1月～2008年4月	全日本企業福祉協会で、ダスキン本社・ミスタードーナツ本社・そごう本社の万歩計プロジェクトに従事した。保健師として、身体計測、生活習慣指導（食事・運動）および相談を行なった。生活習慣の改善により、バイタルサインや身体測定の数値が著明に改善することを実感し、その重要性と在宅生活者の健康改善に寄与するやりがいを知った。
26. 大阪大学医学部附属病院キャリア開発センター 感染管理コースⅠ修了	2005年6月1日～2006年3月31日	計12回（1回90分）のコースを修了し、実践に活かした。
27. 大阪大学医学部附属病院キャリア開発センター 緩和ケアコースⅠ・Ⅱ修了	2005年10月20日～2006年10月30日	計24回（1回90分）のコースを修了し、実践に活かした。
28. ホスピスケア研究会「がんを知って歩む会」ファシリテーター研修修了	2004年8月28日～8月29日	ホスピスケア研究会が開催する「がんを知って歩む会（在宅及び入院中のがん患者と家族のためのサポートプログラム）」にボランティアとして複数回参加し、ファシリテーター研修（東京）を修了した。
29. 第9回 大阪癌とQOLセミナー 一般演題発表	2004年7月31日	外照射を受ける患者がもつ放射線治療に対する認識の変化～放射線・放射線治療に関するオリエンテーション用紙導入前後の比較

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
30. 病棟における洗浄・消毒・滅菌の業務改善	2002年5月1日～2006年12月31日	大阪大学医学部附属病院で、感染リンクナースとして、洗浄・消毒・滅菌に関する勉強会を主催した。共有した知識をもとに業務改善リーダーとして改善に取り組んだ。具体的には、消毒液による被曝の軽減、清拭車の洗浄・乾燥方法の改善と効率化、手洗いシンの分別化と清掃方法の標準化、速乾性手指消毒液やペーパータオルの設置方法の改善を行った。
31. 大阪大学医学部附属病院 病棟看護師	2001年4月1日～2006年12月31日	感染管理リンクナース、業務改善リーダー、クリティカルパス委員
4 その他		
1. 武庫川女子大学看護学部まちの保健室（メンバー・渉外担当・広報担当）	2017年2月1日～現在	武庫川女子大学看護学部まちの保健室プロジェクトの開始当初からメンバーとして参加し、渉外および広報を担当している。 渉外としては、医師会、歯科医師会、薬剤師会、市役所支所、公民館、自治会、保健所、社会福祉協議会、民生・児童委員協議会常務会、近隣の会館等を訪問し、ご挨拶や周知、協力・後援依頼を行なった。また、市や三師会の行事と日時が重ならないよう、毎月調査・確認を行っている。 広報としては、チラシ・大判ポスターの印刷や配架・連絡、看護学部ブログへの記事の掲載、学部広報委員会との連携などを担当している。 まちの保健室開催時にはメンバーとして、健康相談や骨強度測定を協働して実施している。
2. 看護学部丹嶺研修参加	2015年4月	看護学部の丹嶺研修に自主的に参加し、学生との交流を深めたり、広報・記録用の写真撮影を担当したりしたほか、学生が体調を崩した際はリスクマネジメントのための要員として機能した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 在宅医療と多職種連携－看護師の視点	共	2018年6月30日	日本臨牀社、日本臨牀第76巻 増刊号5 『老年医学（上）－基礎・臨床研究の最新動向－』	訪問看護の役割と対象、24時間対応や周知の必要性、マンパワー不足と対応、今後の訪問看護、多職種連携・地域連携の実際、多職種連携における情報共有、人生の最終段階における医療・ケアについて、筆者の研究を踏まえ、これらの最新動向をまとめた。
2. 在宅ホスピス	共	2018年11月	ヌーヴェルヒロカワ、『エンドオブライフケア看護学』	在宅ホスピスケアを担うサービスについて、訪問看護を中心に説明した。
3. 補完代替医療	共	2018年11月	ヌーヴェルヒロカワ、『エンドオブライフケア看護学』	統合医療・補完代替医療の考え方と、エンドオブライフケアにおいて看護師が活用できるアロマセラピー、ユーモアの活用等について説明した。アロマセラピーについては自身の臨床経験から説明すると共に、環境を重視するナイチンゲールの言葉や、自身のカラーセラピーの経験を踏まえて記述した。
4. 死の認識理論	共	2018年11月	ヌーヴェルヒロカワ、『エンドオブライフケア看護学』	死の認識理論について、主に4つの認識（文脈）を説明し、本理論に基づく自身の研究を紹介した。
2 学位論文				
1. 終末期がん患者に対する看護師の感情・行動傾向～死の Awareness 理論による分析	単	2001年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文	終末期がん患者のケアにおいて、患者の死が間近であるということを看護師がどのように捉え対応しているかは看護の質向上のために重要である。本研究は①終末認識の4タイプの割合を明らかにすること、②各認識における看護師の感情・行動傾向を明らかにすることを目的とした。質問紙調査法。予備調査（n=33）と先行研究によるアイテムプール916件から抽出した47項目でプリテスト（n=131）を実施し、項目分析、主成分分析を行い30項目を抽出し「終末期がん患者への看護師の感情・行動尺度」を作成し信頼性と妥当性を確認した。本調査は病棟看護師258名を対象とした（回収95.7%）。データの解析はSPSSにより因子分析、t検定等を行なった。分析対象者は217名（有効回答87.8%）、平均30±7歳、看護経験9±7年であった。 終末認識の割合は、閉鎖32%、疑念26%、オープン22%、相互虚偽12%であった。 第1因子は4認識共に感情傾向から構成されており、看護師はまず感情レベルで患者に対応していた。看護師自身の不安や無力感等に関するものであり、自我の脅威感情の因子と解釈した。一方、第2・3因子において、次のような各認識の特徴がみられた。オープン認識では、病気や死の話題を回避せず話し合う積極的な行動傾向がみられた。閉鎖認識では、患者のニーズに応える行動傾向や、病気や死の話題を回避する行動傾向がみられた。相互虚偽認識と疑念

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				認識は類似しており、病気や死の話題を回避する行動傾向と、有意義な余生のための援助行動傾向がみられた。 各因子の得点を認識間で比較し、以下のような示唆が得られた。オープン認識では肯定的な感情・行動傾向、疑念認識では最も否定的な感情・行動傾向がみられた。相互虚偽認識と疑念認識で行動傾向が類似していた。 看護師の年齢や経験年数が高いほど、自我の脅威感情に関し肯定的な傾向がみられた。
3 学術論文				
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. The Association of Blood Pressure Level with Clinical Events in Old Patients with Home Medical Care	共	2018年9月	The 27th Scientific Meeting of the International Society of Hypertension (Beijing, CHINA)	The aim of this study was to investigate the association of blood pressure level with clinical events in old patients receiving home medical care. "sBP <120" can be a marker predicting the general condition leading to hospitalization. Elderly people may maintain good condition if BP is maintained to some extent. In old patients who received home medical care, excessive BP reduction such as sBP<120mmHg may be related to the occurrence of events leading hospitalizations and "sBP <120mmHg" can be a marker predicting the general condition leading to hospitalization. Therefore, it was suggested that careful BP management is necessary in old patients requiring long-term care. 共著者：Koujiya E, Kabayama M, Huang Y, Yamamoto M, Akiyama M, Yoko Higami, Rakugi H, Kamide K.
2. 在宅療養する認知症高齢者の行動心理症状の実態と関連要因の検討 - OHCARE研究 -	共	2018年6月	日本老年医学会第60回学術集会	在宅で訪問診療を受療する認知症高齢者の療養状況や行動心理症状 (BPSD)、薬物療法の実態を把握し、利用している社会サービスや介護度との関連性を検討することを目的とした。協力機関である在宅療養支援診療所にて訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち、認知症患者110名 (82歳±11歳) を対象とした。各診療所の診療記録、主治医意見書より情報収集し、介護度、BPSD、治療、利用している社会サービスについて解析を行った。対象者の内の33.6%で認知症病型の診断がついていた。訪問診療を受ける高齢認知症患者のBPSDの実態が明らかとなり、要介護度が高いほど複数のBPSDを併発していることが分かった。またBPSDを呈す者でも約40%は非薬物療法を主体に症状がケアされており、多職種で認知症高齢者の在宅療養を支えている現状が明らかとなった。 共著者：樋上容子, 糺屋絵理子, 黄雅, 小玉伽那, 山本真理子, 秋山正子, 樺山舞, 樂木宏実, 神出計
3. 在宅療養高齢者における訪問診療導入の経緯別に見た患者特性の検討	共	2018年6月	日本老年医学会第60回学術集会	在宅で訪問診療を受療している在宅療養高齢者の、訪問診療導入の経緯別に見た患者特性を明らかにすることを目的とした。OHCARE研究の協力機関にて訪問診療を受けている217名について、訪問診療導入の経緯ごとにパターン化を行った。訪問診療を導入したパターンは、1) 外来通院から自宅等での訪問診療に移行したパターン35%、2) 病院入院から自宅等での訪問診療に移行したパターン44%、3) 施設において訪問診療を受けているパターン19%、4) 施設を退去し自宅等での訪問診療を開始したパターン1%の4つに分類された。通院群と入院群を比較すると、通院群の方が高齢で女性の割合が高かった。介護度は軽度重度に分けると入院群の方が重度である傾向がみられた。通院群と入院群の間には患者特性に明瞭な差があることが明らかになった。 共著者：小玉伽那, 糺屋絵理子, 黄雅, 樋上容子, 秋山正子, 山本真理子, 樺山舞, 樂木宏実, 神出計
4. 訪問診療受療中の療養者における在宅療養中断と死亡に関連する要因の検討 -訪問診療記録と訪問看護記録からのレジストリー研究 (OHCARE研究)	共	2018年6月	日本老年医学会第60回学術集会	前向きコホート研究。2015年3月-2018年5月に在宅療養支援診療所8施設 (大阪・兵庫) において訪問診療を受けており同意の得られた患者を対象とし、診療記録と訪問看護指示書・報告書・計画書から、看護師または保健師経験のある研究者がデータを収集した。訪問診療受療中の患者において、高年齢、低栄養、食事要介助であること、歩行自立など要介護度・寝たきり度が低く、認知症でないことが在宅療養中

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. 訪問診療受療中の患者の在宅死亡に関連する要因の検討—訪問診療記録と訪問看護記録からの多施設レジストリー前向きコホート研究 (OHCARE研究)	共	2018年11月	第29回日本老年医学会近畿地方会	<p>断・死亡に関連していることが示唆された。CGAにより、ADLや栄養に関する生活機能を具体的に評価できた。在宅ケアにおいてエビデンスを蓄積し、生活機能評価を活用していく必要がある。</p> <p>共著者：秋山正子，樺山舞，糀屋絵理子，黄雅，山本真理子，樋上容子，樂木宏実，神出計</p> <p>訪問診療受療中患者の在宅死亡への関連要因を明らかにすることを目的とし、高齢者総合的機能評価 (CGA) に注目し検討した。在宅療養支援診療所8施設において訪問診療を受けている患者を対象とし、診療記録と訪問看護記録から情報を収集した。3年間の前向き追跡で「在宅死亡」「入院入所死亡」2群のベースラインデータを比較し、在宅死亡への関連要因を分析した。患者246名のうち在宅療養を終了した116名を分析した。平均年齢は85±10歳、在宅死亡46%であった。CGAによると低栄養に57%、寝たきりに75%、認知症に66%が該当した。比例ハザード分析の結果、食事要介助、Hb低値、低年齢、Plt高値が在宅死亡に影響していた。食事のADLや貧血が特に在宅死亡に関連しており、栄養評価の重要性が示唆された。</p> <p>共著者：秋山正子，樺山舞，糀屋絵理子，黄雅，山本真理子，樋上容子，樂木宏実，神出計</p>
6. 終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応とGood Death—死のウェアネス理論における終末認識による分析 (査読付)	共	2017年9月	日本エンドオブライフケア学会 第1回学術集会	<p>①終末認識の4タイプの割合、②終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応 (以下対応)、③終末認識と対応、Good Deathの関連を明らかにすることを目的とした。対象者の属性、終末認識、対応尺度、看取りケア尺度、Good Deathからなる自記式質問紙を用い郵送にて配布・回収を行なった。SPSSにより因子分析、一元配置分散分析、多重ロジスティック回帰分析を行なった。対象者は387名、平均46.8歳であった。終末認識の割合は、オープン67%、閉鎖11%、疑念9%、相互虚偽7%であった。対応として【感情】【希望支援】【情報】の3因子が抽出された。疑念よりもオープン・閉鎖において、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。訪問看護師の感情がより肯定的であるほど、死へのケアがより望ましいものであるほど、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。</p> <p>共著者：秋山正子，樺山舞，久米弥寿子，神出計，小笠原知枝</p>
7. Seasonal Changes in Blood Pressure and Serum Electrolytes for Older Patients with Home Medical Care. (査読付)	共	2017年7月	The 21st IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics (San Francisco)	<p>We investigated seasonal variations of BP and serum electrolytes in order to obtain suggestions about future effective treatments or nursing care in old patients with home medical care. Study subjects were 78 patients age 65 years or older receiving home medical care participating in Osaka home medical care registry (OHCARE), a prospective cohort study. The mean age of the subjects was 84 and male was 37%. Mean SBP and DBP was higher in winter than in summer (122 ± 17/65 ± 10 vs. 124 ± 20/68 ± 10mmHg) and there was statistically significant difference in DBP (p=0.007). Especially, high SBP group (SBP ≥130mmHg) had greater changes both in SBP and DBP than low SBP group (SBP<130mmHg).</p> <p>共著者：Koujiya E, Kabayama M, Sakanoue K, Huang Y, <u>Akiyama M</u>, Yamamoto M, Rakugi H, Kamide K.</p>
8. Association of Visiting Nurses' Response with Cancer Patients' Good Death by Awareness of Dying Type. (査読付)	共	2017年7月	The 21st IAGG World Congress of Gerontology & Geriatrics (San Francisco)	<p>The aim was to determine the association of VNR (Visiting Nurses' Response) with GD (Good Death) in AOD (Awareness of Dying) types for end-stage home cancer patients. We sent self-administered questionnaires to visiting nurses and statistically analyzed. Participants' average age (N=386) was 46.8 years. The proportions of AOD type were OA (open) (67.1%), CA (closed) (10.6%), SA (suspected) (8.8%), and MPA (mutual-pretense) (7.3%). The GD score of OA was higher than SA (p=.01) and the CA was higher than the SA (p=.01). In dealing with information related to patient's death, the VNR score was higher for OA than for SA (p=.01). The higher VNR score was significantly associated with the higher GD scores.</p> <p>共著者：Akiyama M, Kabayama M, Kuyama K, Kamide K.</p>
9. 訪問診療を受療している在宅療養高齢者における要介護度悪化に関連する要因—OHCARE研究— (査読付)	共	2017年6月14日～16日	第59回日本老年医学会学術集会 (名古屋)	<p>訪問診療受療中の高齢者の要介護度悪化に関連する要因を検討することを目的とし、在宅療養高齢者147人 (男性54人、平均84±8歳) を対象とした。カルテや医療従事者への聞き取りから情報収集した。初回調査から約1-1.5年後に追跡調査を実施し、要介護度維持群と悪化群に分け多変量ロジスティック回帰分</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. 訪問診療を受療している在宅患者における認知症合併する高齢者高血圧の現状（査読付）	共	2017年6月	第59回日本老年医学学会 学術集会（名古屋）	析を行った。初回は要支援1-要介護3の軽中度群が46%、要介護度4以上の重度群が36%であり、骨関節疾患罹患率は37%であった。追跡時における維持群は45%、悪化群は32%であり、要介護度悪化には、骨関節疾患罹患（OR4.5）が独立した有意な関連を示した一方で、筋力低下が2肢以下であること、糖尿病・脂質異常症に罹患していないことも、有意な関連が認められた。在宅療養高齢者の要介護度悪化の要因として、骨関節疾患罹患が最も強く関連していた。 共著者：山本真理子，樺山舞，坂上和子，糀屋絵理子，黄雅，井上貴子，秋山正子，樂木宏実，神出計
11. 訪問診療を受療している在宅療養高齢者における血圧、電解質の季節変動とその要因に関する検討—OHCARE研究—（査読付）	共	2017年6月	第59回日本老年医学学会 学術集会（名古屋）	在宅高齢高血圧患者の降圧治療実態及び認知症を併存する場合の血圧コントロール状態を検討した。在宅療養支援診療所で受療している179名を対象にカルテ等から情報を収集した。認知症有無別の高血圧患者の降圧治療実態と血圧値を検討した。分析対象者179名、平均84歳、高血圧116名、認知症合併は87名であった。降圧治療において単剤使用（43%）のうちCa拮抗薬の使用頻度が最も多くARBとループ利尿剤も多かった。前期高齢者と比較し後期高齢者のDBPが有意に低かった。要介護が重度であるほどSBP・DBP共に有意に低かった。認知症合併群のSBP・DBP共に認知症なし群より約3mmHg低かった（125/68vs128/71）。認知症合併群において認知症が重度であるほどSBPが有意に低かった。85歳以上の超高齢者においてもSBPが10mmHg低く（p=.024）、DBPも低い傾向があった。 共著者：黄雅，樺山舞，坂上和子，糀屋絵理子，秋山正子，山本真理子，井上貴子，樂木宏実，神出計
12. Awareness of Dying of End-stage Cancer Patients in Home and Visiting Nurses' Cognitive Correspondence.（査読付）	共	2017年3月	20th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Science) (Hongkong)	We aimed to determine the types of awareness of dying and the factors of visiting nurses' cognitive correspondence in Japanese home cancer care. We sent self-administered questionnaires to 659 visiting nurses. Data was statistically analysed using descriptive statistics and factor analysis with SPSS 23.0. We received 399 (60.5%) replies and analysed 386 (96.7%) valid responses. We verified that the scale we used was reliable and valid. We performed factor analysis and identified three components that we termed as "emotional attitudes", "care to fulfil wishes" and "explanation about death or illness". The α coefficient had a range of 0.76-0.86. 共著者：Akiyama M, Kamide K, Kuyama K, Kabayama M, Nitta N.
13. 在宅医療を受ける高齢者の季節変動に伴う血圧・腎機能変化に関する検討—OHCARE研究（査読付）	共	2017年3月	第81回日本循環器学会 学術集会（金沢）	在宅医療を受ける高齢者において季節変動に伴う血圧・腎機能の変化の実態を調査しその傾向を把握することを目的とした。在宅訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち初回と6か月後調査で夏季、冬季に調査を行なった78名（平均84歳）を対象とした。診療記録より情報を収集し、季節変動と血圧、腎機能、電解質の変化を解析した。sBP、dBPの平均値は夏季122.4±17.4/65.4±10.1、冬季124.5±20.1/68.4±10.0と冬季が高く、dBPにおいては統計的に有意であった（P=.007）。冬季sBP140をカットオフとすると、血圧高値群でsBP、dBP共に有意差が認められた。採血データではCreで夏季の方が有意に高かった。Naは夏季の方が高く、Kは冬季の方が高かった。これらの変動を把握した上で、医師や訪問看護師は、患者個々に最適な治療、ケアを検討する必要がある。 共著者：糀屋絵理子，樺山舞，坂上和子，黄雅，井上貴子，秋山正子，山本真理子，樂木宏実，神出計
14. 在宅療養者のレジリエンス尺度の	共	2017年11月	第7回日本在宅看護学会	在宅療養者のレジリエンス尺度を検討することを目

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
検討（査読付）			学術集会	的とした。訪問看護または外来診療を受けている397名に自記式質問紙調査を行なった。調査内容は属性、レジリエンス項目、自尊感情尺度、精神的回復尺度、日本語版ソーシャルサポート尺度。因子分析、相関分析等を行ないレジリエンス尺度の信頼性、妥当性を検討した。有効回答215名(54%)、男性126名(59%)、60歳以上178名(83%)、要介護認定53名(25%)、訪問看護利用者33名(15%)であった。レジリエンスは3因子『療養者の周囲からの支援』『療養者の内面の強み』『療養者の対処する力』から構成された。Cronbach αは.85-.93、内容妥当性は複数の在宅看護学研究者外来・訪問看護師と確認した。各因子と外的基準との相関が認められた。本尺度は信頼性、妥当性が確保されていると考えられる。
15. 在宅療養高齢者における血圧コントロールの実態と療養中イベントとの関連性 - OHCARE研究 - (査読付)	共	2017年10月	第40回日本高血圧学会総会	在宅訪問診療受療高齢者において血圧管理・降圧治療の実態を把握するとともに、血圧コントロール群別に療養中イベントとの関連性を検討する。複数の在宅療養支援診療所で訪問診療を受けている65歳以上の患者のうち初回と追跡調査(6か月-12か月後)が可能であった151名(84±8歳)を対象とした。ベースラインsBP、dBPの平均値は123/68。降圧薬内服者は94名(62%)。sBP120以上群(93名39.6%)、sBP120未満群(61名60%)の2群において比較を行うとsBP120未満群においてsBP120以上群より「褥瘡あり」「呼吸器疾患あり」の割合が有意に高かった(p=.01)。追跡においてsBP120未満群ではsBP120以上群より「療養中の入院イベント」の割合が有意に高かった(p<.01)。過度な降圧は避けるべきと考えられた。
16. 在宅医療を受療している認知症患者の生活習慣病管理に着目した認知機能悪化要因の検討：OHCARE研究(査読付)	共	2017年10月	第28回日本老年医学会近畿地方会	在宅医療を受療している認知症患者において認知機能の維持・悪化に関連する要因を明らかにすることを目的とした。複数の在宅療養支援診療所で在宅医療を受けている認知症高齢者を対象とした。情報は主にカルテより収集した。2年間の追跡データから、認知自立度から悪化・維持に分け、関連要因を多重ロジスティック回帰分析で検討した。対象者は116名(平均85歳、女性73名)で、認知機能維持群76%、悪化群24%であった。女性において、認知機能維持の要因は、認知症自立度重度(OR0.28)並びに降圧薬の内服(OR0.27)が独立した関連要因で、男性では有意な要因はみられなかった。在宅医療を受ける認知症高齢患者において認知機能の維持・悪化には生活習慣病の要因が関与すると考えられ、女性において降圧薬内服が認知機能を維持する可能性が示唆された。
17. 在宅医療受療者における認知症合併糖尿病患者のコントロール状態の検討(査読付)	共	2016年10月	第27回日本老年医学会近畿地方会(大阪)	在宅医療受療者において認知症と糖尿病の関連を検討し、両疾患を併存する場合の糖尿病治療の現状を明らかにすることを目的とした。基礎情報と介護情報をカルテ等より収集した。分析対象者155名(平均83歳、要介護3以上55%)中、糖尿病55名で、認知症合併は35名であった。認知症の有無により糖尿病コントロールに差はなかったが、認知症合併群でDPP4阻害薬の使用率が高い傾向を示した。認知症合併例のHbA1cはDPP4阻害薬使用例で有意に高値を示した。認知症かつ糖尿病治療薬使用群では認知症や要介護認定が重度であるほどHbA1cが有意に高かった。糖尿病治療薬使用の患者では重度要介護、中重度認知障害でHbA1c値が有意に高値であった。糖尿病コントロールが難しい可能性と、血糖を安全な範囲にコントロールしている可能性が示唆された。
18. 訪問診療受療中の在宅療養者における転倒に関連する要因の検討—OHCARE研究—(査読付)	共	2016年10月	第27回日本老年医学会近畿地方会(大阪)	在宅療養者における転倒発生の現状を把握し、転倒要因を検討することを目的とした。訪問診療受療中の192名を対象として約1年間の転倒発生状況を調査し、「転倒あり」「なし」群に分け発生要因の比較検討を行った。平均年齢は82歳で、罹患疾患は高血圧症71%、骨関節疾患(52%)、認知症(41%)が多かった。追跡期間中の転倒は30名(16%)であった。転倒あり群で有意に高率に認められた項目は、脳血管病変と骨関節疾患、認知症治療薬使用、Alb値

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
19. 精油使用施術における皮膚障害発生の現状とその頻度についての報告（査読付）	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会第12回学術総会	<p>、認知症の下位項目であった。多変量解析では骨関節疾患（オッズ比6.7）、血清アルブミン値（4.2）、日常生活の意思決定を行う為の認知能力：非自立（3.1）で正の、呼吸器疾患（0.2）、移動：非自立（0.2）で負の有意な関連が認められた。転倒の要因として骨関節疾患や認知症が示唆された。</p> <p>共著者：坂上和子，樺山舞，福崎円香，奈古由美子，井上貴子，黄雅，秋山正子，山本真理子，樂木宏実，神出計</p> <p>所属する在宅医療クリニックを受診する在宅患者を対象として精油使用施術を受けた254名中、皮膚障害発生は4例でみられ、感受性皮膚炎2例（.79%）、刺激感1例、発赤・掻痒感1例であった。施術者7名には皮膚障害は発生しなかった。皮膚障害を生じた精油は、Juniperus communis, Lavandula angustifolia/Rosmarinus officinalis ct. camphor/Mentha×piperita, Origanum majoranaであった。</p> <p>共著者：秋山正子，辻本綾子，吉岡美恵子，宮里文子，村田正典</p>
20. スイートオレンジによる気分の改善効果（査読付）	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会第12回学術総会	<p>診療所付属の女性の健康センターに通所する在宅成人女性を対象としたスイートオレンジによる精油使用施術（下肢、背部、上肢、デコルテ）の前後で、気分プロフィール尺度（POMS）と脈拍および血圧の変化を検討した（n=24）。POMSの評価項目では、6つの下位項目全てにおいて有意な改善がみられた（p<.001）。また、拡張期血圧も有意に低下し（p<.01）、収縮期血圧も有意に低下した（p<.001）。加えて脈拍数も低下した（p<.001）。スイートオレンジによる精油使用施術が、気分の改善に有効で、ストレスの緩和にも効果的である可能性が示唆された。</p> <p>共著者：宮里文子，森田和代，秋山正子，神保太樹，大門美智子</p>
21. 精油が抗細菌・抗真菌作用を示したと考えられる3症例（査読付）	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会第12回学術総会	<p>外来診療と在宅での訪問診療を行なうクリニックを受療する患者を対象として、白癬症の2例に精油加軟膏（真正ラベンダー、ゼラニウムブルボン、白色ワセリン）を在宅で1日数回塗布してもらい、治癒した。難治性潰瘍、糖尿病の1例には、標準的治療の継続が奏功しないことを確認した後、クリニックでの処置時、精油加洗浄液（ティートリー、生理的食塩水）で洗浄した後、精油加希釈油（真正ラベンダー、ティートリー、グレープシードオイル）を塗布、ガーゼで被覆し、約80日間で治癒した。今後、精油使用が創傷処置における代替療法となりうる可能性が示された。</p> <p>共著者：村田正典，辻本綾子，吉岡美恵子，秋山正子</p>
22. 真正ラベンダーにより治療した手指粘液嚢腫の5例（査読付）	共	2009年10月	日本アロマセラピー学会第12回学術総会	<p>手指粘液嚢腫の5例に対して真正ラベンダー加ワセリン（3%）を処方し、1日数回塗布してもらった。全例で塗布開始3～10日で疼痛は消失し、経時的に嚢腫は縮小した。4例は治癒し、治癒後1～3年経過した現在まで再発は認めていない。最近の1例も良好に経過している。手指粘液嚢腫の治療は穿刺、ステロイド・硬化剤注入などが選択されるものの再発が問題となる。今回、本疾患が治癒した詳細は不明であるが、局所をマッサージする効果のほか真正ラベンダーに含まれるリナロールや酢酸リナリルなどの芳香成分が抗炎症作用や鎮痛作用を示し、変性した組織や細胞を除去、修復した一方で組織再生作用、治癒促進作用を示したためと推測された。</p> <p>共著者：村田正典，辻本綾子，吉岡美恵子，秋山正子</p>
23. 終末期がん患者に対する看護師の感情・行動傾向—死のアウェアネス理論による分析（査読付）	共	2009年12月	第20回日本看護科学会学術集会	<p>終末期がん患者における終末認識の割合、看護師の感情・行動傾向を明らかにすることを目的とした。916アイテムから47項目を抽出しプリテストを実施、項目分析・主成分分析で30項目を抽出し終末期がん患者への看護師の感情・行動尺度を作成、信頼性・妥当性を確認した。分析対象は病棟看護師217名で30±7歳であった。割合は閉鎖32%、疑念26%、オープン22%、相互虚偽12%であった。第1因子は4認識共に感情傾向から構成され、第2・3因子においてオープンでは死の話題を回避せず話し合う行動、閉鎖ではニーズに応える行動や、死話題回避行動がみられた。相互虚偽と疑念は類似し、死話題回避行動と有意な余生のための援助行動がみられた。オープンで肯定的、疑念で否定的な感情・行動傾向がみられ、相互虚偽と疑念で行動傾向が類似していた。年齢や経験年数が多いほど肯定的な感情傾向がみられた。</p> <p>共著者：長坂（秋山）正子，久米弥寿子，小笠原知枝</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
24. 看護婦（士）と看護学生の死生観に関する質問紙調査－死のイメージ・考え・態度による分析（査読付）	共	1999年3月	第12回日本看護研究学会 近畿・北陸／中国・四国地方会	看護婦（士）と看護学生の死生観をイメージ・考え・態度から明らかにすることを目的とし、質問紙調査を行なった。5段階リッカート尺度を作成し、イメージについてはSD法を採用、データ解析はSPSSを用いてt検定を行なった。死は漠然としたマイナスイメージと捉えられ、考え・態度の因子分析では、死生観は、「関心・意味づけ」「宗教的・霊的考え」「恐怖・不安」「行動的態度」などの5因子から構成されていた。看護学生は、看護婦（士）と比し、死をより「疎遠な」「わからない」と捉え、生に対してはより楽観的と考えられた。死生観に影響を及ぼす因子として専門的・個人的経験が示唆された。 共著者：長坂（秋山）正子，久米弥寿子，小笠原知枝
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. CGA-HOME（在宅版高齢者総合的機能評価）の開発－OHCARE&OHCARE-NS研究	単	2017年11月	OHCAREサミット	OHCARE研究（Osaka Home Care REistry study）のメンバーとして、OHCAREサミットを開催し、自身の研究内容について発表した。サミットは、在宅ケアに携わる医師や看護師を含む研究グループ全体で研究結果を共有し、今後の発展につなげて行く場として開催した。
2. NPO法人関西アロマセラピストフォーラム研究部活動（臨床・研究・教育）	共	2007年3月～ 2010年4月	NPO法人関西アロマセラピストフォーラム	NPO法人関西アロマセラピストフォーラム研究部を副代表として組織し、共同研究を行なった。研修では、研究動機的重要性やアロマセラピーにおける研究について、ナイチンゲールの医療統計における功績、ケアにおける看護やアロマセラピーの位置づけを踏まえ講義した。
3. 放射線治療における看護～当病棟での看護を中心に	単	2004年4月	第27回 ターミナル期がん看護における理論と実践のシンポジウム研究会	大阪大学医学部保健学科基礎看護学研究室が臨床看護師と合同で開催していた研究会において、「放射線治療における看護～当病棟での看護を中心に」という表題で発表した。所属する放射線科・アイソトープ病棟において実施されている放射線治療看護について、「放射線治療の概要」「副作用別のケア」「疾患別のケア」「3年目研究について」としてまとめ説明した。
4. 多発性骨転移がある40歳代男性患者のニーズをみたすケアをめざして	共	2004年12月	第31回 ターミナル期がん看護における理論と実践のシンポジウム研究会	大阪大学医学部保健学科基礎看護学研究室が臨床看護師と合同で開催していた研究会において、「生体肝移植後多発性骨転移がある40歳代男性患者のニーズをみたすケアをめざして」という表題で発表した。病棟内だけでは困難事例として捉えられていた事例だが、他病棟・他病院の看護師や研究者の意見を聞くことで、新たな視点を得ることができた。
5. 翻訳）がん患者への臨床第Ⅰ相試験：参加者の認識。	共	2000年1月	がん看護	原著；Catherine Hutchison:Phase I trials in cancer patients:participant's perceptions.European Journal of Cancer Care 7:15-22,1998 がん患者が臨床第Ⅰ相試験に参加する際の認識を明らかにするため、がん患者（n=28）を対象に面接を実施した。患者の期待は現実的なものであり、患者らは、臨床第Ⅰ相試験に参加することにより、質的・量的に優れたケアを受けることができると感じていた。 共著者：長坂（秋山）正子，高橋育代
6. 看護婦（士）と看護学生の死生観に関する質問紙調査－死のイメージ・考え・態度による分析	共	1999年5月	がん看護	【がん看護：連載講座 JJCCレクチャー】《投稿論文の書き方》原著論文の書き方・その2 コメンテーター：久米弥寿子，小笠原知枝 草稿提供：長坂（秋山）正子 原著論文をまとめるさいに留意したいことについての連載において、「その1」のコメントを受けての修正稿を作成した。
7. 看護婦（士）と看護学生の死生観に関する質問紙調査－死のイメージ・考え・態度による分析	共	1999年1月	がん看護	【がん看護：連載講座 JJCCレクチャー】《投稿論文の書き方》原著論文の書き方・その1 コメンテーター：小笠原知枝 草稿提供：長坂（秋山）正子 原著論文をまとめるさいに留意したいことについての連載において、草稿を提供した。研究の基本はテーマ的確な把握であること、研究法の特徴を論文に反映させること等を、実際の投稿論文草稿に照らし合わせながら説明された。
6. 研究費の取得状況				
1. 在宅看取りの満足度に関連する要因～在宅診療記録・訪問看護記録と質問紙の量的分析	共	2017年4月～ 2020年	科学研究費補助金（基盤研究C） 課題番号：17K12506	研究目的は、在宅終末期患者とその家族のアウトカム（QOL、満足度、状態等）が良好で在宅療養を継続できているのは、どのような患者・家族にどのような

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
-------------	-------------	---------------	-----------------------	----

6. 研究費の取得状況

2. 在宅療養者と家族のQOLに影響するレジリエンスの解明と在宅療養支援モデルの構築	共	2015年～2018年	(代表) 科学研究費補助金(基盤研究C) 課題番号: 15K11831 (分担)	な支援を行なった場合かを明らかにすることである。訪問診療記録・訪問看護記録を分析し、患者・家族・訪問看護師に質問紙調査を実施する。情報収集とアセスメントにあたりオマハシステムや既存の尺度を活用し、データは量的(一部質的)に分析する。 在宅療養者とその家族のレジリエンスの要素を明らかにし、在宅療養者および家族のQOLに影響を与えるレジリエンスとそのレジリエンスの強化のための在宅療養支援モデルを検討することを目的とし、質問紙調査を行なっている。
3. 終末期がん療養者に対する訪問看護師の感情・行動傾向	単	2015年～2017年	科学研究費補助金(研究活動スタート支援) 課題番号: 15H06779 (代表)	①終末認識の4タイプの割合、②終末期がん療養者に対する訪問看護師の対応(以下対応)、③終末認識と対応、Good Deathの関連を明らかにすることを目的として質問紙調査を行ない、量的・質的に分析した。対象者の属性、終末認識、対応尺度、看取りケア尺度、Good Deathからなる自記式質問紙を用い、郵送にて配布・回収を行った。SPSSにより因子分析、一元配置分散分析、多重ロジスティック回帰分析等を行った。対象者は387名、平均46.8歳であった。4タイプの割合は、オープン67%、閉鎖11%、疑念9%、相互虚偽7%であった。対応として【感情】【希望支援】【情報】の3因子が抽出された。疑念よりもオープン・閉鎖において、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。訪問看護師の感情がより肯定的であるほど、死へのケアがより望ましいものであるほど、訪問看護師は終末期がん療養者の死をGood Deathと捉えていた。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年9月15日～9月16日	日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会 一般演題 座長
2. 2018年6月16日	日本老年医学会第60回学術集会 一般演題 座長
3. 2018年11月17日	第29回日本老年医学会近畿地方会 一般演題 座長
4. 2017年9月1日～現在	看護質的統合法(KJ法)研究会 会員
5. 2017年6月10日～11日	第19回 日本母性看護学会学術集会 実行協力員(メイン会場司会・会場案内)
6. 2017年2月1日～現在	武庫川女子大学看護学部まちの保健室(メンバー・渉外担当)
7. 2017年2月1日～現在	武庫川女子大学看護学部まちの保健室(メンバー・広報担当)
8. 2016年9月7日～現在	オマハシステムジャパン 賛助会員
9. 2016年9月3日～9月4日	第15回日本アディクション看護学会 実行協力委員(メイン会場司会)
10. 2016年9月10日	吹田市みんなの健康展(血圧測定・健康相談ブース担当)
11. 2016年4月28日～現在	日本老年医学会 会員
12. 2016年11月25日～現在	日本エンドオブライフケア学会 会員
13. 2015年5月1日～現在	日本在宅看護学会 会員
14. 2015年4月	武庫川女子大学開設記念講演(会場案内・救急担当)
15. 2015年～現在	日本訪問看護財団 会員
16. 2014年11月28日～現在	日本在宅ケア学会 会員
17. 2007年3月1日～2010年4月1日	NPO法人関西アロマセラピストフォーラム 実行委員・研究部副代表
18. 2007年2月1日～2011年12月1日	NPO法人・レンタルスペース・イベント・訪問にてアロマセラピー・カラーセラピーの実践
19. 2007年2月1日～2010年4月1日	緩和ケア病棟におけるアロマセラピー・カラーセラピーボランティア
20. 2000年6月23日～現在	日本看護科学学会 会員